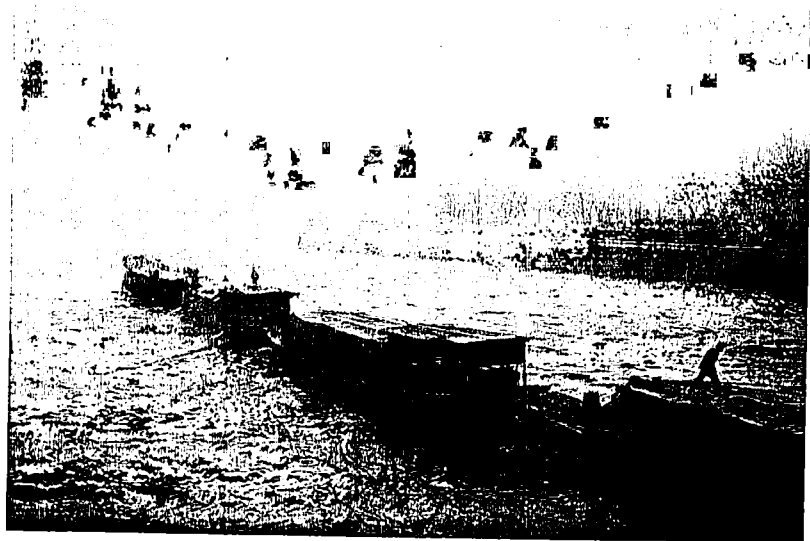


水がなければ、性根はすべて灰となる。だから水が来て蒸をたすけて、本源へと回帰するのである」。



特集 変革期のアジアと宗教

「神社跡地」とみたま送り ——台湾と日本の狭間の、ある心霊主義的事例

——ところで、われわれがこれに…否定的ではあるが無限な自由、人生の種々さまざまな偶然的事件で惑乱させられたりすることがないように、ソクラテスがダイモニオンにおいてもついていた落ち着き、これらをつけ加えるならば、ソクラテスの立場はまたしてもイロニーとして現れる。ひとは一般に…いかに全人生がイロニーのうちで過ぎゆくことができるかをそれほど容易には理解しえない。なぜなら、この人生の内容が無と見られねばならぬからである。(S・キルケゴール『イロニーの概念について』⁽¹⁾より)

はじめに

二〇〇八年八月のある日、筆者は台北市の「中華民国総統府」参観者の列にあつた。国民党の蒋介石が台北に政権を移した一九五〇年に総統府となつたこの建物は、元来は一九一九年に日本の台湾総督府として完成している。日本語解説員の八〇歳位の台湾人男性は「歴史の真実」の語を繰り返しながら、半世紀の台湾総督府時代に関する事のみを語り続け、以下のように締めくくつた。

「明治天皇さまの下で、西洋や世界の知識を取りいれ、日本は素晴らしく発展したでしょう？ 台湾もその中で発展したのです。若い人達は知らされていないが、台湾

すが ことじ

菅 浩二

と日本はそうして結ばれている：それが「歴史の真実」なのです。

筆者は丁度その八年前、今は亡き台湾人女性宗教者が語った「明治の御代に結ばれた日本と台湾の絆」の言葉を思い出していた。天寿により確実に失われている、最後の日本語世代の台湾人が口にするこの様な表現は、勿論その青少年期、昭和一〇年代の政治的修辭の断片である。情勢緊迫に伴い大日本帝国全域の政治・文化的一元性が強調され、「皇民化」の掛け声の下、台湾でも在来文化温存方針が「改善打破」へと劇的に転換するのが、昭和一一（一九三六）年から翌年の事である。⁽²⁾

台湾社会にあつて、第二次大戦後の国民党統治下では逆に公言が憚られたこの種の修辭は、三八年間続いた戒嚴令の解除（一九八七年）頃より再び言葉化され、平成の日本人の前に姿を現した。無論、植民地主義批判の面からは、この前時代的な修飾表現を再生させる意識は「日本奴化教育遺毒」でしかないだろう。しかし、先の解説員氏の「歴史の真実」もそうだが、数多の生と死を抱え込みつつこうした「絆」が言葉化される場面に出会

1 「コイン」の託宣

〈：「中国人」と大書した札を胸に付けた李登輝と宋楚瑜と連戦、そして「台湾人」の札を付けた陳水扁。「總統」の椅子に座る李登輝が「中国人」の札を自ら外すと、そこには「台湾人」の札が。やがて彼が椅子から立ち上がると、残る三人が武器を持ち大格闘した末、陳水扁が「總統」の椅子に座る。李登輝がその後ろに立つが、その時何と、ポロリと外れた李の「台湾人」札の下から「日本人」の札が現れる。画面を覆う笑い声：〉

史上二度目の總統直接選挙から三ヵ月後の二〇〇〇年八月。本事例の某盤を構成する人々、日本人のM氏、N氏、そして台湾人の妙慧法師（以下「慧師」）らと筆者が出会った頃、台湾のTV画面では著名政治家に扮した芸人達がそんな風刺劇を演じていた。この芝居が描く政治流動と本件は、ほぼ同時期の出来事である。「中国人」「台湾人」の札は、やがて「泛藍」「泛緑」と呼ばれる二つの政治陣営に対応する。「日本人」の札は「皇民候補

う時、筆者はしばしば、話者の生の奥底から沸き起こる叫びを聞くような思いを抱いてきた。表面上のイデオロギーへの客体性を超えて、彼らが現実世界に対して自由であろうとする時の葛藤が、そこに含まれている事を感じるのである。

本稿は、二〇〇〇年春から夏のある小規模な心靈主義的事例の報告と考察を通じ、流動する日台関係がその間に生きる人々の心の奥に映ずる影の一端を、このような問題意識に基づき垣間見ようとするものである。「小規模」とは、本件が戦後世代の台湾在住日本人男性二人と先述の台湾人女性宗教者の三人の心靈的経験と解釈を基に、彼らと直接接触した人々によってのみ構成されている事による。故に本稿では、現代台湾社会に見るエスニシティ意識の重層性については極めて限定的な扱いに留まっている事を、初めに断っておきたい。事例の性格上大半が仮名となるが、筆者の面談記録と、関係者による記録文書・手記・書簡類を使用し、以下に本件を再構成する。⁽³⁾

の皇民選挙」とも揶揄された前回選挙の勝者・李登輝への痛烈な皮肉である。⁽¹⁾

M氏（一九五一年生）は東京都出身。二人兄弟の長男。彫刻家を志したが、大学芸術学科卒業後は展示デザイン会社に就職。他社に移籍した後一九七九年に台北に移住。服飾店・百貨店等の商業空間設計、内装、業態開発までを手がけ、顧客は東・東南アジアに幅広い。但し毎月一度は台北・東京を往復、病気がちな母親（二〇〇六年死去）を見舞い日本での仕事をこなす生活を続ける。渡台後、台南市出身の外省人（国民党と共に移住した、原籍を中国大陆に持つ人々）二世の女性と知り合い、一九八一年結婚。当初東京に住んだが、妻が日本になじめず一年ほどで台北に戻る。一男一女をもうけるが、二〇〇〇年当時は妻とは別居中（のち離婚）で、市内の事務所を住居にしていた。

N氏（一九六二年生）は一人息子。幼少期より父親の転勤で日本各地を転々とし、大学は関西。中国文学に関心を持ち、高橋和巳の小説にも親しむ。卒業後は百貨店に就職。一九九二年上司の縁で結婚。その後二度、台湾